

(1) 黄色い下着 2019年3月2日刊行

新年に縁起を担ぐ慣習は世界各地にみられるものである。南米ペルーでも、年の瀬になると、新年を祝うさまざまな商品が市場に並ぶ。

店頭には置かれた品物のなかでひととき目に付くのが、鮮やかな黄色の下着である。うず高く積まれた黄色いかたまりのなかには、子ども用の小さなものから超特大まで幅広いサイズが取りそろえられている。店先ではこの時とばかりに黄色い下着のまとめ買いがなされる。いつから始まったのか定かではないが、この光景は今では年末の風物詩になっている。

この国では正月は黄色い下着をはくのが習わしなのである。黄色い下着を身に着けて新年を迎えることで運気が増し、幸運に恵まれると信じられている。どこの家でも、たんすを開ければ必ず黄色い下着が入っているとまで言われるほど、誰もが一度は身に付けるものである。

とはいえ、なぜ黄色なのだろうか。これは、黄色が幸運を象徴するだけでなく、エネルギーの源である太陽の色だと考えられているからでもあるという。日本では子どもが絵に描くお日様は赤色をしていることが多いが、ペルーで太陽といえば黄色で塗られるのが常である。エネルギーを象徴する黄色いものを直接身に付けることで活力を得るという発想から、下着が好まれているようだ。



露店に並ぶ黄色い下着=ペルーで 2018年、筆者撮影

(2) 赤い種子 2019年3月9日刊行

ペルーでは小さな赤い種子をあしらったアクセサリーをよく見かける。この種子は、熱帯地域に生育するマメ科の樹木からとれ、「ワイルー口」という名で呼ばれる。身につけた人を悪いものから守り、幸運をもたらすと信じられている。

とくにワイルー口はお金と一緒にしておくといわれ、財布のなかに小さなサイズのワイルー口を入れ持ち歩いている人もいる。金運に恵まれるからである。鮮やかな赤色をしたこの種子には、オスとメスがあることでも知られ、メスは赤一色であるが、オスには黒い大きな点がついている。両方を一緒にしておくことで、子宝に恵まれるという言い伝えもある。

古くはインカ時代から魔よけのお守りとしても用いられていた。古代の人たちは、悪霊から逃れるためにすり潰して飲むこともあったという。ワイルー口には悪いものを寄せ付けない強い力があると考えられていたのだ。

今でもお守りとして、生まれたばかりの赤ん坊にワイルー口のブレスレットを贈ることがある。邪視によって引き起こされる、災いや病気から子どもを守るためである。そういわれてみれば、ワイルー口のオスはどことなく目のかたちにも似ている。悪意や嫉妬の目で見えてくる人をギロリとにらみかえしてくれそうだ。



ワイルー口のキーホルダー＝ペルーで2018年、筆者撮影

(3) 屋根の上の牛 2019年3月16日刊行

ペルー南部の村では、瓦屋根の頂に魔よけとして牛の置物を飾っている家がたくさんある。家に悪いものが入ってこないように牛が屋根の上から見張っているのだが、その姿は勇猛というより、むしろユーモラスである。二つの大きな角をもつ反面、飛び出たようなまんまるの目や舌で鼻をなめるような表情はどこか愛くるしい。

素焼きの陶器でできたこの牛の置物は、産地の名をとって「プカラの牛」と呼ばれている。家の安全を見守るだけでなく、幸運や繁栄をもたらすとも信じられ、新築祝いの贈り物としても好まれている。屋根に飾るときには、必ずオスとメスをセットにする。つがいは夫婦をあらわすという。愛嬌たっぷりの表情で屋根の上にたたずむ2匹はなんとも穏やかで、円満な家庭を象徴するかのようである。

この牛は、アンデスで古くから儀礼の際に使われてきた、動物の置物に起源があるといわれる。石や木でできた小さな動物は、家畜の安全や繁殖を祈願するささげものとして用いられていた。むろん、牛は植民地化以降に西洋からやってきたものである。十字架と一緒に牛が屋根に飾られるのもキリスト教の影響である。時代の流れのなかでさまざまな要素が入り交じり、牛は屋根の上のにぼったようである。



屋根の上に置かれた牛＝ペルーで2019年、筆者撮影

(4) 福を呼ぶ男 2019年3月23日刊行

アンデス高地の町では商店などに、ちょっと変わった風貌の人形が置かれているのを目にする。アンデス高地の先住民男性に似た服装で帽子をかぶり、両手を広げた格好の人形である。その小太りの体には、何やらえたいのしれないものがたくさん付けられている。よく見ると、鍋、洗剤、缶詰、ビールなど日用品や食料品のほかにも楽器やテレビ、車、札束などがぶらさがっている。

エケコという名で親しまれるこの人形は、福をもたらす神として知られ、店先や自宅に飾られる。エケコには普段から食べ物や酒をささげ、願い事をするときにはたばこをくわえさせなくてはならない。そして自分の願いをかたちにしたミニチュアを買ってはエケコにぶらさげるのだ。エケコは持ち主の奉仕に応じて、その望みをかなえてくれるという。だが、奉仕をおろそかにすれば、災いがおこるともいわれるから恐ろしい。

エケコは、ボリビアの先住民アイマラの人たちがあがめていた神がもとになっており、豊穡を祈願して穀物などを奉納していたのがその習わしの始まりだという。とくにアイマラの女性たちのあいだでは、よき伴侶や多産に恵まれるとして大切にされてきた。ただ、昨今のエケコは、パスポートや土地の登記書など、現代人のじつに複雑な願いを背負わされてしまっている。



等身大のエケコ人形＝ペルーで2018年、筆者撮影

(5) ミニチュア雑貨 2019年3月30日刊行

ボリビアの主要都市ラパスでは毎年1月中旬になると、ミニチュアの雑貨を集めた市が立つ。米や砂糖などの食料品や日用雑貨のほかにも、車、家、スーツケースやお金など、どれも本物そっくりに作られている。市では、自分が実際に手に入れたいと思うもののミニチュアを購入するのである。

アラシータの名で知られるこの縁日は、福をもたらす神として有名なエケコにゆかりがあり、近年はエケコ人形に飾るものを買う場として発展している。訪れた人は、ミニチュアを購入すると、それを持ってそのままラパスの大聖堂へ向かう。そこでミニチュアに聖水をかけて祝福してもらった後、自宅に持って帰るのだ。そうすることで、願いがかなうといわれている。

この市で人びとが買い求めるのは、物質的な豊かさを願うものばかりでない。大学の卒業証書、弁護士や医師など各種資格の証明書、婚姻や離婚の証書類など、夢をかなえようとする人も多い。

最近では、ノートパソコン、スマートフォン、電子レンジ、ドルやユーロといった外貨に加えて、クレジットカードや米国ビザなどを取りそろえている店もある。市場経済化やグローバル化が進むなかで、人びとが求める幸せのかたちも変化しつつある。



市で売られるミニチュアの数々 = ボリビアで 2006 年、筆者撮影